

紹介文：梨木香歩『ほんとうのリーダーのみつかけかた』

周りに流され、自分が本当に思っていることにフタをした経験を、誰もがもっているだろう。また、同調圧力により、自分の良心とは違う意見を認めてしまったこともあるかもしれない。本書は、そのような経験をもつ、あるいはそのようなことを考えたことがある若者への、著者（梨木香歩）からのメッセージである。

「ほんとうのリーダー」はどこにいるのだろうか？タイトルを手がかりに読み進めると、意外にも著者は、本当のリーダーは、他の誰でもなく自分自身であると説く。自分の中のリーダーを見つけ、育て上げ、「自分で構成された群れ」を形成することが、自らの個性を大事にしていることに繋がる。そのためには同調圧力に促されない、即ち周りに流されずに自分自身で考えることをやめないこと、自分を客観視すること、感じた疑問や怒りを素直に認めて周りに発信することが、自分を強くする上で大切なのだと著者は言う。

人々はいつも「群れ」を形成したがらる。著者は、その例示に「テレビの実験」を挙げ、人々が、絶対的にみんなと自分の意見が違ってても、同調圧力、つまり周りに流され、自分の意見を殺してしまう、弱い存在であることを認める。その上で本書は、このような傾向にあらがう術として、先に触れたように「ほんとうのリーダーは自分の中にいる」ことを教えるのである。著者は、歴史的な事例や哲学者の言葉だけでなく、テニススポーツの事例などのわかりやすい例も挙げている。そのため、本書はとても読みやすく、考えるために立ち止まり、自分自身の経験を振り返りながら、読み返すことのできる一冊になっている。

本書で繰り返し説かれる、同調圧力や「群れの一員としての幸せ」といった問題は、現代の政治問題に通じるのみならず、私たち高校生にとっても身近なSNSにも当てはまるだろう。また、本書は、日本人に今まさに求められている力が的確に示されている。今の日本社会にある同調圧力という現象は、個人の意見を蔑ろにするものだ。だから、私たちは自分の疑問を受け止め、発信していく必要がある。例えば、選挙で投票するときには周りの意見を鵜呑みにせず、本書を手がかりとしながら、自分の判断で選ぶようにしたい。また自分の意見を発信しつつも、それが正しいと決めつけずに、他者との考えの違いも理解することも大切だろう。本書から得られる教訓は、人生のターニングポイントにある高校生にとって、とても大きいものだ。

紹介文：大栗博司『探究する精神：職業としての基礎科学』

本書は、物理学（素粒子論）を研究する世界レベルの研究者である大栗博司の手による自伝的著作である。自分は文系人間、理系人間と、自分で枠をはめてはいないだろうか。この本は、文理の垣根を疑い、それを越えようとする高校生や、自分の専門分野以外にも目を向け、自分の知見を増やすことで、いずれ社会に貢献したいと思っている高校生にとって、良きガイドブックになるだろう。

本書は、自分の好奇心や探究心にしがたって、好きなものを突き詰め、自由に研究していると、いずれ社会の役に立つ研究となることを教えてくれる。著者は研究に対して真剣でありながらも、とても楽しそうである。未知の研究を真剣に楽しむことで、幅広いものに应用できる価値ある研究につながる。価値ある発見や新しい視点は、一見、関係のないことの融合によって生まれることを、著者は自らの経験を通して、読者に説得的に語りかける。

本書の読みどころは、著者の強い好奇心と探究心を感じられるところだ。本書の第一部では、著者が影響を受けた本や考え方が書かれている。著者の専門は物理学なのだが、読んだ本は物理学や化学にとどまらず、数学や哲学、文学作品なども多い。一見、科学とは無関係に見えるこれらが、後半の第二部、第三部で著者の研究人生を振り返った時、意外なところで役に立っている。また、著者が物理学を志すことになったきっかけであり、研究人生を支えてきたのも、小学生の頃からの好奇心だ。まさに題名の通り、著者の人生は探究する精神によって作られてきた。

本書が教えてくれることは、興味を持ったことを突き詰める楽しさと幅広い知識の大切さだ。強い好奇心と探究心があつてこそ、学問も知識も極められるのだ。進路選択の岐路に立つ高校生のうちに、ぜひ、本書を読み、好奇心と探究心の凄さや素晴らしさ、そして大切さを体験してほしい。